

地域教育力を活かしたESD活動の充実～誇りと持続発展に貢献できる人材育成～

北海道斜里高等学校 校長 赤津 博久

担当者 福田 敦

1 本校のESDの特徴

本校は、世界自然遺産知床に位置し、豊かな自然や、縄文時代にまで遡る歴史や文化に身近に触れることのできる環境である。その一方、生徒はその希少性や重要性への気づきや、持続発展させていくことへの必要性に対する認識が浅い傾向があり、課題であった。そこで、総合学科への学科転換を機に、地域の豊かな自然を教材とした学校設定科目「知床自然概論」を設定するとともに、歴史文化を学ぶ特別活動として「史跡巡見学習」、地域産業などと連携した科目「課題研究（知床学）」などを設定し、地域の教育力を存分に活用した教育活動を推進している。

また、学校設定科目「産業社会と人間」や「総合的な探究の時間」とも合わせて、発表などの活動の機会を取り入れることで、自ら考え、学び、伝え、行動する積極性や表現する能力の育成を目指している。

2 活動・全体計画

- (1) 学校経営シラバスへのESD活動推進の明記
- (2) 各教科・科目におけるシラバスの作成
- (3) 「目指す生徒像」「身につけてほしい資質能力」の全教職員での共通理解
- (4) 高校生対流促進事業における地域留学生の積極的な受入
- (5) 2年次・3年次「課題研究（知床学）」（4月～3月）、3年次学校設定科目「知床自然概論」（4月～1月）、異年次混合ゼミ（7月・3月）、史跡巡見学習（9月）知床自然体験学習（10月）、学習成果発表会（1月）

3 活動事例

ESDの実践として、全教科・科目、特別活動、課外活動等にESDの理念を踏まえたキャリア教育を重ね、地域の魅力の気づきや、地域に誇りを持つ気概、また「自ら考え、学び、伝え、行動する」積極性や、表現する能力の育成を目標とした。

具体的には、環境教育、観光教育、キャリア教育を柱とし、(1)知床の自然や歴史文化理解に係わる活動、(2)地域連携による観光に係わる学習、(3)「産業社会と人間」・「異年次混合ゼミ」による課題解決能力に係わる学習、を行った。

(1) 知床の自然や歴史文化理解に係わる活動

① 史跡巡見学習（2年次生全員）

郷土の歴史について理解を深め、次世代の担い手としての歴史観を養う。博物館職員による事前講義と、チャシコツ岬上遺跡におけるオホーツク文化期の遺構や出土した土器・石器等を見学した。



② 知床自然体験学習（2年次生全員）

環境保全の意識を高め、自然界に対する畏敬の念や、野外でのルールを遵守する態度を育成する。林野庁の協力を得て、知床横断道路付近のポンポロ沼周辺や象の鼻の散策、サケ・マス孵化場での遡上観察を行った。



③ 知床自然概論（3年次選択）

フィールド学習を中心に世界自然遺産である知床の生物、地質や生態系についての学習活動。斜里町立知床博物館、東京農業大学北海道オホーツクキャンパス、知床ネイチャーオフィス、斜里町役場環境課、シマフクロウ研究会、海鳥研究所、知床自然大学院大学などから外部講師を招き、年間36時間程度行われた。



④ 課題研究（知床学）

知床という地域環境について、自らの体験を通して自然の姿を理解し、科学的な重要性や脆弱さを認識するとともに、自然科学的な興味の高揚を図る。また、知床の抱える問題や歴史を振り返ることで、そこに生きてきた人々、社会的状況を理解した上で、産業や観光、自然保護の啓発活動の方法を考えた。



(2) 地域連携による観光に係わる学習

① 観光ビジネス

地域について深く学び、地元への愛着を育むとともに、他校生と連携し特産品で交流を図り、販売実習体験をキャリア教育に活かすとともに、様々なコンテストに参加する。また、台湾で行われた日本観光物産博覧会にて地域のPR活動も行った。



② 観光情報

地域の課題をデジタルコンテンツで解決するための「FileMaker」を使用したアプリ開発の取組。町内の飲食店を紹介するアプリやオホーツクの魚を紹介し料理レシピを載せたアプリ、観光に訪れた観光客の利便性を高めるためのアプリを開発した。



(3) 「産業社会と人間」「異年次混合ゼミ」による課題解決能力に係わる学習

① トークフォークダンス

地域の大人と高校生が特定のテーマについて語り合う。生徒のコミュニケーション能力の向上や、地域に参画するきっかけ作りになった。また、多様な人と対話することの楽しさを体感させることができた。



② 異年次混合ゼミ

ESDの推進やSDGsを理解するとともに、講師などの地域資源を有効に活用し、地域と共に年間を通じた学び。ドローン、環境、子ども、編集・取材、自然、環境、地域、ねふたなどのゼミを展開した。



4 成果と課題

「今年度時点で学校を魅力的に思うか」という生徒アンケートをとったところ「思う」42%、「普通」39%、「思わない」19%という結果だった。今後も魅力の向上に努めることで、生徒のより深い学びを実現していく。

課題としては、高校生対流促進事業における地域コーディネーターを軸として地域との連携をより一層強化する必要がある。